

TEAP リーディング・リスニング問題のトピック と認知領域に関する予備研究

<概要>

本稿では、TEAP リーディング・リスニング公開見本問題を大まかに2つの観点から分析した結果を報告する。まず問題文のトピックと文体を分類し、学習者が中等教育までに身につけたスキーマを活用しやすい問題かどうかを検討した。次に、問題に解答するために必要と思われる認知活動領域を、ブルームの改訂版タキソノミー (Anderson, 2001) を用いて明らかにすることを試みた。これらの分析が、TEAP が日本の中等教育と高等教育にどのように活用し得るかを論じる上で、何らかの示唆につながることを期待した。

<はじめに>

TEAP の日本の大学入学選抜試験や入学後のプレイスメントテストとしての親和性を検討する場合、様々な観点からの分析を行う必要がある。英文構造や語彙分析などを言語学の観点から精査をしたり、テストの観点から解答の傾向や分布を統計的に探究にすることができよう。では私はどのような立ち位置で何に取り組んだら何かの貢献ができるだろうか。そう考えた際に、自分の研究テーマはバイリンガリズム、特に言語習得と認知発達であることから、TEAP の問題に、問題に伴う背景知識や思考の深さの観点からアプローチできるのではないかと考えた。そこで2022年10

月から12月にかけて、手始めにTEAP リーディング・リスニング公開見本問題が受験者に要求するスキーマと認知領域に焦点をあてて予備調査を行うこととした。

<研究課題>

この予備研究では、第一の着目点であるスキーマとは、「目の前にある事象を理解する時に利用する認知的知識構造」（白畑他, p.262）ととらえる。たとえば immune system という英語を理解するには、免疫体系とは何か、という知識を母語で持っていなければ、訳語がわかったところで、本当に理解したことにはならない。このように、第2言語で行う活動に際しては、物事の文化的、あるいは概念的知識とも言えるスキーマの活性化が重要とされている。特にリーディングでは、中谷(2011)によると、出来事構成 (orient-organized) スキーマの構築が体験や経験に基づいて構築されて、対話や特定表現の理解を促進する。たとえば文化的に馴染みのあるテーマや自分の身の回りの事について読む場合と、そうでない、未知の状況設定の文の場合には、内容の理解度が異なってくる。そこで、本稿では、TEAP の英文が要求するスキーマはどのようなものかを探るため、問題のトピックと文体を調べることにした。

課題1. TEAP のリーディング・リスニング問題は、どのようなトピックと文体で構

成されているか。

次に、TEAP リーディング・リスニング問題は、どのような認知活動を伴うのか、思考のレベルを可視化することを試みた。

Test of English for Academic Purposes という名称が示す通り、アカデミックな場面における英語力測定をうたっているこの試験では学習言語能力、すなわち CALP (Cummins, 2000)が必要とされる。ひとくちに CALP と言っても、具体的には複雑な思考過程が関連しているため、本稿では、問題を解く際に起こる思考プロセスを分析することを目指した。

課題 2. TEAP のリーディング・リスニング問題は、どのような認知プロセス領域 (Cognitive Process Dimension) 活動を伴うか。

<研究方法>

2022 年 12 月時点でウェブ公開されている TEAP 公開見本問題 Reading 60 問 Listening 50 問を分析対象とした (<https://www.eiken.or.jp/teap/construct/>)。研究課題 1 は、問題を 1 問ずつ、トピックと文体を帰納法的にラベリングしていった。最初にラベリングしたトピック同士を再度見直して、上位概念にまとめることができるものは統合し、更に細分化すべきトピックは新たなラベルを追加した。例えば Reading Section Part I (5) は

The members of graduating class planted a cherry tree next to the college's main gate to () their graduation.

1 commit

2 commemorate

3 commute

4 compensate

という穴埋め問題であるが、このトピックは「大学生活」、文体は「説明文」と分類した。

一方、研究課題 2 では、各問題の認知領域をブルーム改訂版タキソノミーの 6 領域、即ちレベル 1-記憶(Remembering)、レベル 2-理解(Understanding)、レベル 3-応用(Applying)、レベル 4-分析(Analyzing)、レベル 5-評価(Evaluating)、レベル 6-創造 (Creating)に分類していった。このタキソノミーではそれぞれのレベルがさらに詳細なサブカテゴリーに分類され、具体例も挙げられているため、緻密な分類が可能となる。前述の Reading Section Part I (5) は、文中の括弧に入る動詞を、4 つの選択肢から選ぶという語彙の知識を問う問題であるため、「レベル 1-記憶」に分類した。

<結果と考察>

課題 1

Reading 60 問については、大学生活、たとえば授業や課題などに関するトピックが最も多く、36.7%を占めた。問題設定として、履修科目変更の方法や、大学当局からのオンラインアンケートなどが含まれていた。続いて社会学が 21.7% であり、例えばアメリカ社会における結婚の概念についての長文が出題されていた。また、少数ではあるが経営、経済、環境等の現代社会の抱える問題やテーマが含まれていた。一方、高校生活や

数学、医療、歴史、スポーツ等は含まれていなかった。表1がこれらのまとめである。

表1

Reading トピック分類

トピック	問題数	割合 (%)
大学生活	22	36.7
社会学	13	21.7
言語学	5	8.3
伝記	5	8.3
日常生活	4	6.7
旅行・留学	2	3.3
経営	2	3.3
経済	2	3.3
環境	1	1.7
教育学	1	1.7
天文学	1	1.7
地理	1	1.7
生物	1	1.7

一方、リスニング問題のトピックは表2の分布となった。半数が大学生活に関するトピックと分類され tutor（この場合、家庭教師ではなく、日本の大学の TA）や study skill center など、海外の大学での慣習に基づく会話やアナウンスの聴き取りがあった。経済、旅行・留学、心理学がそれに続いた。科学概論というトピックは、科学と社会の関係を紹介したレクチャーであった。リスニング問題はリーディングよりもトピックの点で偏っており、日常生活の会話、物理、化学、情報といった理系のトピックは皆無であった（表2）。

表2

Listening トピック分類

トピック	問題数	割合 (%)
大学生活	27	54
経済	7	14
旅行・留学	4	8
心理学	4	8
科学概論	3	6
社会学	2	4
生物	1	2
環境	1	2
伝記	1	2

次に問題文の文体を調査した結果が表3である。リーディングでは、説明文と論説文で合わせて8割を占めた。客観的な書き方や議論を展開している文体が多いことが特徴的であった。少数ではあるがメール、ブログ、勧誘（ウェブ上で何らかの勧誘を行う文体）も見られ、オンライン媒体の英文の読解力が求められていた。

表3

Reading 文体

文体	問題数	割合 (%)
説明文	27	45.0
論説文	22	36.7
ナラティブ	5	8.3
メール	2	3.3
勧誘	2	3.3
ブログ	1	1.7
会話文	1	1.7

リスニング問題文の文体は、表4に示す

通り、会話が4割弱を占め、レクチャーが3割弱、そして説明文が2割を占めた。授業や普段の大学生活に必要とされる状況設定である。ニュースやナラティブも少数であった。

表4

Listening 文体

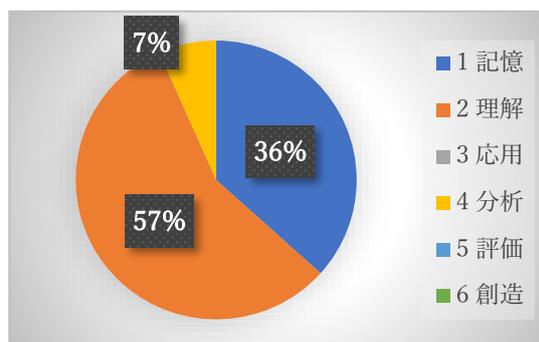
文体	問題数	割合 (%)
会話	19	38
レクチャー	14	28
説明文	11	22
ニュース・報道文	4	8
ナラティブ	1	2
教員のコメント	1	2

以上のトピックと文体の分析からは、TEAP のリーディング・リスニング問題は大学生にとっては馴染みがあり、既に持っている背景知識や体験に基づくスキーマを使うことができるであろう。海外の大学に留学した経験があれば、単位の取り方、履修の方法、異文化などについての英文は、理解しやすいことが予想される。しかし、一方で高校生が TEAP を受験する場合には、問題文の状況や背景にある文化に関する知識が不足していることが考えられる。たとえば graduate student が大学院生を示すことを知っている高校生は少ないのではないか。言い換えれば、TEAP のリーディングとリスニングの公開問題は、日本の高校生にとっては、英文のコンテキストや、表現している概念が想像しづらい問題設定であるかもしれない。

課題2

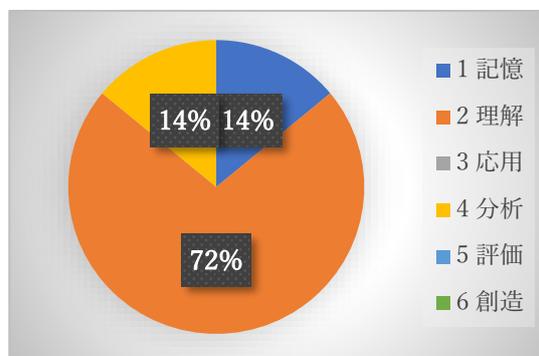
TEAP 問題の認知領域を、アンダーソン（ブルーム改訂版）タキソノミーにて分類した。リーディング問題を1つずつタグ付けして行ったところ、レベル1－記憶が36%を占め、レベル2－理解が57%、レベル4－分析が7%を占めた(図1)。その他のレベル、たとえば6－創造は、リーディングやリスニングという受容技能を測定する試験であるので該当する問題はない。

図1. リーディング問題の認知領域



リスニングでは図2が示すようにレベル1－記憶が14%、レベル2－理解が72%、レベル4－分析が14%を占めた。

図2. リスニング問題の認知領域



これら認知領域の分布からは、大きな特徴が浮かび上がる。それは、「レベル2－理解」がリーディング問題の半数以上、リスニング問題の7割を占めるということである。レベル2は細分化すると解釈、例示、分類、要約、推論、比較、説明という下部概念にわけられ、これは学問探求に不可欠な認知プロセスであるが、外国語でこれらの思考を伴う活動に従事することは容易ではない。読み手や聴き手は、単に字面を追ったり聴いたりするのでは不十分で、さらに深く考えたり、既知の知識と照らし合わせたりするプロセスが求められる。この観点からTEAPはまさに、学問で必要な言語力をテストしていると言える。大学生のTEAP受験は、特にEAPにおいてはアカデミック英語力測定に適していると言える。

一方、課題1の結果と同様に、TEAP問題は高校生にとっては難易度が高いと感じられる可能性大である。過去に高校の、コミュニケーション英語I検定教科書5シリーズを分析した研究では、「レベル1－記憶」の発問とタスクが圧倒的に多かった(鈴木、河野、平井, 2016)。無論、あくまでも教科書分析の結果ではあるが、そのような教科書を使用して、記憶型の英語学習を行った高校生にとって、TEAPの問題は難解ととらえられるであろう。高校で英語力が高い生徒を対象に、探求型の活動を英語で行わせるカリキュラムでなければTEAP受験には太刀打ちできないかもしれない。

もう1つの特徴は、リスニング問題でリーディングや図表理解の統合スキルの習得を問う問題がある点である。一例として、聴きとった情報を時系列に整理し、それに合

致するグラフを4つの中から1つ選ぶという、極めて高度な思考を伴う問題があった。このプロセスは母語で行っても難しく、ましてや外国語で、限られた時間内に解答しなければならない。これはTEAPが、英語を媒体として学問的探究を行うEMI(English as the medium of instruction)環境を前提にしているための傾向かもしれない。

<結論と今後の課題>

本稿では、TEAPリーディング・リスニング見本問題について二つの研究課題をたてた。まず、課題1のトピックと文体の分析については、大学生活に関するトピックと、説明文の文体が最も多かった。つまり、高校生には難しいが、大学生、特に留学経験のある大学生には、すでに持つスキーマを活用するという点で、解き易い問題設定であることが明らかとなった。また、経済や社会学の分野の題材は含まれていたが、情報、数学、医療、芸術などの分野は扱われていなかった。TEAPを大学のプレイメントテストとして使用する場合、受験者の学部や専攻が及ぼす影響がないかどうか、今後精査することが望まれる。

課題2の認知プロセス領域分布では、アンダーソンのタキソノミーのレベル2が最も多い結果となり、高次の、複雑な思考を伴う問題が出されていた。聴くことと読むことと、グラフ読み取りの力を統合的に要求する問題もあった。TEAPの問題は、課題1の結果もあわせると、超高校レベルの試験であると言える。しかし改訂された高校の新指導要領では、内容の深い理解と論理

的思考が推奨されており、高校での新しい英語教育像と方向性を一にしていると言える。

一方、大学においては、学生は、英語でのアカデミックリテラシーを構築することを目指すので、この予備研究で明らかになった傾向から、TEAP がプレイスメントとして妥当性を持つことが示唆されたと言える。分析対象が公開問題のリーディング 60 問、リスニング 50 問に限られているため、結果の一般化には慎重にならねばならない。今後、公式問題集の分析や、スピーキング、ライティングという産出スキル問題の分析を行えば、TEAP を大学における英語カリキュラムにどう組み込むか、より明確化することが期待される。

鈴木広子・河野円・平井清子. (2017), PISA 型読解力養成を目的とした活動の設計—高校英語教科書の分析から—. *JACET-Kanto Journal* 4, 36-50.

<参考文献>

Anderson, L., & Krathwohl, D., et al (2001). *A taxonomy for learning, teaching and assessing: A revision of Bloom's Taxonomy of educational objectives*. New York: Longman.

Cummins, J. (2000) *Language, Power and Pedagogy: Bilingual Children in the Crossfire*. Clevedon: Multilingual Matters.

中谷安男. (2011). 「コミュニケーション・ストラテジー」『英語教育学大系第 5 卷第二言語習得』. 165-176. 大衆館書店.

白畑知彦 他. (2019). 英語教育用語辞典第 3 版. 大修館書店.